

西表島の自然保護

— 自然と生活の中で —



小 川 均

はじめに

昭和四十八年十月十九日の朝日新聞に西表島の住民が「国立公園指定の一部解除」を請願したというおおよそめだたい記事がウォーターゲート事件と中東戦争のニュースにはさまれて載っていた。しかし、この記事がもつ意味は記載内容の小ささと比して、遙かに多くの意味を含んでいるようである。

今日、日本人一人一人の自然保護観が地域開発や公害の激発によって、「自然を守る」ことの重要性を「理解」し、大きく変化し始めたようだ。それは、日本の国土から、まるで坂道を転げ落ちていくかのようになり、豊かな自然が足音をたてて失われていく中であって、国民が高度成長よりも自然を保護することが、いかに人間の生活や幸福に必要であるかを痛感しはじめたという時代の大きな潮流の変化である。そうした現実の中で、日本ではとうの昔に失われてしまった原始林が島全体を圧倒している。「豊かな自然」を、たとえ一部であるにせよ国立公園の指定から解除してもらおうよう請願した事件は、一見時代の趨勢とは逆行しているからである。

彼らはなぜ、このような行動をあえてしたのであるうか。簡単にいえば、あまりに

も生活が苦しいからである。だが、そういつて片づけてしまいう前に、西表島がはらむ問題を検討する必要がある。なぜなら、この事件は地方における地域開発と自然保護、自然と生活、自然保護行政と地方自治など、要するに現在、いろいろととりざたされている自然保護の性格が集約されているからだ。そして、これは単に地方のありかたのみならず、今日まで辿ってきた自然保護のありかたを警鐘しているからにはかならない。

西表の自然の「必要性」について

東京から約二、〇〇〇km、沖縄本島からでも実に四七〇km。すでに台湾に近い西表島は「ヤマネコ」の島「珊瑚」の海として知られている。面積は二七、〇八七haで沖縄第二の島である。全島は古見岳（標高四七〇m）を最高に、ほとんど山ばかりで平地は少ない。しかも、海岸から山頂まで文字どおり植物がおおい茂っている。アダン・オオハマボウ・デユゴ・ピロウなどは海岸部に、川にはオヒルギ・メヒルギ・ヤエヤマヒルギなどのマングローブが展開している。山岳部は、アコウ・ガジュマル・ヘゴなどの熱帯広葉樹林、スダジイ・ウラジロガシ・タブ・イスノキなどの照葉樹林がみ

生林といつてよい。これほどの原生林が残っている地域は、沖縄はおろか日本でもほとんどないであろう。しかも、亜熱帯性・暖帯性植物群がほとんど完全な姿で残っている地域は他に類がなく、この意味でまさに「貴重」な自然景観であるといえるであろう。

しかも、この西表の原始林は日本では稀にみるほど、動物を豊富に養っている。イリオモテヤマネコを始めリュウキュウイノシシ・カンムリワシ・シロガシラなどが生息し、また、渡り鳥のコースで、ワシ・タカ類の宝庫である。ハ虫類では日本最大種キシノウエトカゲやセマルハコガメ・キノボリトカゲなどが見られる。サンゴ礁とそこにすむ生物群も美しい。まさに日本最後の「野生の楽園」である。西表島のみごとな自然の美しさ、生物の豊かさは、その「希少」価値と「学術的」貴重さと相まって、まさに国立公園指定に相応しい景観であるといえる。

確かに、自然保護の観点からいえば右の認識は正しいかもしれないが、これはあくまで西表の「自然」だけを抽出した上での話である。しかし、西表の住民はこの豊かな自然由に生活は苦しいといえるのであって、彼らをさておいて、単に生物だけを問題にした自然保護は、地域住民の立場を無

視し生活を制限する結果をはらんでいた。

元来、自然保護とは生物を愛し、自らの生活を開発や公害から守るといふ、きわめてヒューマニスティックなものであるはずであった。だが不幸にも西表の住民が国立公園の指定解除を要求した事実が、「保護か生活」かをめぐっての問題を典型的に示したものである。まず、どうして彼らが指定解除を請願したかを探ってみよう。

西表の歴史

西表島は自然の豊かさと裏腹に住民の生活は貧しい。自然保護論者の主張するように「豊かな自然は、人間を豊かにしないのである。そして、豊かな自然が残っている地域は、それだけ人間の生活が貧しいという日本の性格はここでもあてはまるのである。それは、人間の生活水準の代償に豊かな自然が温存しているのだ、ということがむしる事実のようだ。そして、それを知るには、まず西表の歴史を振り返ってみる必要がある。

西表の歴史はまさに血と涙の歴史であった。明朝の属国であった琉球王朝は、十七世紀初期になると、清朝と薩摩藩の二重支配がはじまり、明治六年までつづいた。その結果、琉球は過酷な収奪が行なわれ、国土も人民も疲弊した。この過酷な収奪によ

る負担を少しでも回避するために琉球王朝

は、宮古・西表・石垣島など所謂先島諸島から、沖繩本島より遙かに過酷な収奪を行なった。したがって、八重山諸島の住民は三重支配によって悲惨な歴史をあゆんだのだ。そのため、経済活動はいちじるしく停滞し、生活は陰惨をきわめた。西表島はまさに忍従の歴史であったのである。この歴史は、八重山諸島の統治が一八七二年薩摩藩から明治政府に移ってからも変わらなかった。たとえば、明治三十六年まで、この地方だけは人頭税が公然と施行されていたことなどはその典型である。また、マツリヤの蔓延する地に、開拓の目的で強制移住をさせたが、結果的には廃村にいたらしめるまでの完全な失敗の歴史があった。強制移住は特に、尚敏王代の宰相蔡温（一七〇〇年代）によって、強力に進められた。また明和の大津波（一七七二年）は八重山の総人口の約三分の一、九、三二三人の死者・行方不明者を出したといわれる。それに

つづく飢饉・疫病などがあいつぎ、一八五四年には、人口一万一千人を数えるにすぎなかった。明治以後も人口は増えず、ようやく一九一七年になって、一八七年ぶりに八重山の人口は明和の大津波以前にもどったのである。その後、戦時中、日本軍の命令により、西表島民はマリアの発生する

山中に強制疎開され、その間島民は次々に

マリアに犯され、人口は、八千から四千人に減ってしまった。そして、今日でも西表島はこれらの悲惨な歴史からは立ちなおっていないのだ。西表の自然が比較的完全な姿で残ったのはマリアの蔓延で、容易に開発の手を寄せつけなかったことが大きく関係していた。現在、アメリカ軍によるDDT散布のおかげでマリアは完全に撲滅された。だが、沖繩本島の人口密度六五一人に対し西表のそれは一人であることは、いかに西表の歴史が悲惨であったかを如実に示している。結局、西表経済は自然と歴史によっていまだ立ち直っていないのである。だから豊かな自然が残ったのも右のような経過が働いていたからだ。

生活と産業

ところで島の東部の一部にはバスがあっても、西部にはない。西表島は竹富町に属するが役場は隣の石垣市の中に仮住いしている。島の東部と西部を結ぶ生活道がまったくないからである。本土では考えられないことだが、同じ町内で連絡するすべがないのだ。そのため、西表住民の精神的・経済的負担は計り知れないものがある。例えば、両者の交通は、ヒルヤハブの出る山道を二日ばかりで行くか、サバニといわれる

小船で渡るか、大潮の時を狙って海岸づたいに行くか、一旦、船で石垣に行き、また別の小船で引き帰すしかない。島民は実際、最も経済的負担の大きい最後の方法を利用して多い場合が多い。役場への用事にも経済的負担を強いている。島には医者がい人しかいないため、医者のいない西部地区で重症患者が出た時には非常に大変である。そのたびに石垣島から出動するヘリコプターは、ただでさえ悪化している町財政を圧迫している。三千の島民は、働くべき産業もなく開発すべき資金もなく、ほとんど半農半漁の自給自足の生活をしている。このような社会的蓄積の極端な貧弱さの中で、西表島民は近代技術の恩恵も受けず、非常な不便をかこっているのだ。

一九七〇年五月沖繩は日本に復帰した。そして、西表は「西表国立公園」に指定された。その西表の実態を、一九六〇年に米国民政府の要請によって、スタンフォード研究所が「西表の資源及び経済の潜在力に関する調査報告書」にまとめて提出した。それによると、西表の総生産は五五万五千ドルであった。一人わずか五万円にすぎない。その内訳は農業六三%、パイナップル一五%なのに対し、漁業二%、林業二%、サービス業一%にしか過ぎない。農業は大半がサトウキビとパイナップルであり、産業構造と

小船で渡るか、大潮の時を狙って海岸づたいに行くか、一旦、船で石垣に行き、また別の小船で引き帰すしかない。島民は実際、最も経済的負担の大きい最後の方法を利用して多い場合が多い。役場への用事にも経済的負担を強いている。島には医者がい人しかいないため、医者のいない西部地区で重症患者が出た時には非常に大変である。そのたびに石垣島から出動するヘリコプターは、ただでさえ悪化している町財政を圧迫している。三千の島民は、働くべき産業もなく開発すべき資金もなく、ほとんど半農半漁の自給自足の生活をしている。このような社会的蓄積の極端な貧弱さの中で、西表島民は近代技術の恩恵も受けず、非常な不便をかこっているのだ。

しては、一次産業が九〇%をしめ、二次三次産業はほとんどないに等しい。農業もまったくの「零細」専業農家である。たとえば水田は全面積の一・五%、畑はわずかに一・二%である。田畑を合わせても総計七三・一ha、一人あたり〇・二四haに過ぎないのだ。しかも、畑の大半はサトウキビとパイン畑である。残りの耕地で島民の全食料を生産することなど、どだい不可能である。食料品の半分は島外にたよっており、キャベツ一個の値段五〇〇円など、東京でも考えられないほどの高値である。そのうえ、本土復帰と共に西表のサトウキビ、パイン栽培は安い外国産の輸入、補助金の削減と一九七一年の異常な早魃によって壊滅的打撃を受けている。このような基幹産業の危機的状況は西表の経済にどのような意味を持っているかは明らかである。だが、サトウキビやパインを好んで栽培している訳ではないのだ。サトウキビやパインは沖繩の気候に適した作物だとはよくいわれることだが、現実にはそれらにとって変わるべき産業が乏しいためにとられた「窮余」の策であり、政府の補助金がなければ、とうの昔に倒産してはいたはずである。現に西部で随一の工場であるパイン工場は一九七三年に閉鎖された。このように、西表経済は、あまりにも脆弱なのが現状である。そ

れは、青年達の働くべき職場がないことも意味している。そして、青年の島外流出が激しく、深刻な過疎が進行している。人口はすでに三千人を割り、戦前のそれと比して三分の一に減ってしまった。そうして、近いうちに確実に高齢化が進行していくであろう。それは西表の社会を根底からゆるがす深刻な問題となっているのだ。たとえば、土地買取問題で大きく報道された竹富町の竹富島は、人口三〇〇の小さな島であるが老令化が進み、三分の一の約一〇〇人は六〇才以上の年寄りである。

もちろんこのような経済・社会的状態は町財政にも深刻な影響をあたえている。西表島は竹富町の主島であるが、その町財政のうち、市町村税の割合は五%以下（一九六九）である。極貧町村としかいえない。このような町村は沖繩県だけで他に一五もある。だから、税で整備すべき社会サービスの中心である社会・労働施設費が一人千円にも満たない。しかも、一人あたりの市町村税収入が一、〇〇〇円にも満たない（本土での同程度の貧困団体では、一人あたりの地方税収入が一九六八年で六、五一四円である）ことは、独立の自治体として機能するうえで絶望的である。このように、西表経済の極端な停滞は地元資本によって、地域を開発整備していく事を不可

能にしているのだ。

西表の開発と住民が

必要としているもの

ところが、地元経済の不振がつづく中で西表は住民の意向に関係なく本土資本による開発が進んでいる。たとえば、「自然保護か開発」かで問題となったシイ・タブ・カシを中心とした国有林の皆伐が八重山開発株式会社の手によって行なわれているのもその一つだ。八重山開発株式会社は十条製紙の委託によって、これらの照葉樹林をパルプ用材として開発しているのだ。森林の皆伐計画は、一九六一年にはじまり、四十年間に、島面積の約五分の三、一万八〇〇〇haの森林を皆伐し、その跡地にリュウキウカラマツを植林するというものがある。すでに白浜を中心に二、〇〇〇ha程度が伐採された。ちなみに同島の林材蓄積量は四〇七万立方mと推定され、年間の森林成長量は二一萬立方mであり、そのうち五分の三がシイ・タブなどのパルプ用材に利用される種類である。また、この開発に伴う木材搬出用の林道建設も険しい谷の中腹から、切りとった土砂を谷底に落としながら進んでいる。この道路は「開発道」兼「生活道」であるそうだが、西表住民がはたしてどの程度利用できるかは検討

の余地がある。

また、大観光資本による土地買取も進行している。八重山支庁農林水産課の調査（一九七二）では、竹富町全体で三一一haも買取されていた。この面積はすでに町有地・私有地の約一〇分の一の面積に達している。しかも、買取費はきわめて安く、西表島では砂浜や保安林が三・三mあたり一二六円、竹富島では一七二円であった。隣の石垣島では総耕地面積一、三九〇haの一〇分の一が買取されていることから、その凄じさがわかる。また、某私立大学の総合研究所群の建設計画も進行している。このように、現在西表は地元の経済活動にほとんど結びつかない本土資本が、乱開発を進めているのが実情である。だが、西表住民が必要としているのは、雇用の機会も少なく、その上西表の自然を食い潰して行くような開発ではなく、地元住民の生活が安定し、青年達が働け、せめて「本土並み」程度の社会経済整備を保障してくれる産業開発の育成なのである。魚をとりたくとも漁港がなく、農業を経営するにも資本もとほしく作物の栽培保障もない。医療もきわめてめぐまれていない。そして何よりもそれらの条件を整える基盤としての道路がない。西表住民が一貫して訴えているのは、まず第一にこの道路建設なのである。

彼らが道路として予定しているのは「生活道」としての海岸道である。西表の人口は西部・東部に約半数ずつ、海岸附近に点散しながら生活しているが、これらの小さな村落を結びつける交通体系としての海岸道であり、それは単に人物の交流だけにどまらず、精神的な意味においてもきわめて大きな意味を持っている。ところが、林野庁が三分の二の国費を負担して建設している縦断道路は「生活道」としての役割が大きいと述べていながら、バルブ用材搬出用としての性格が濃くにじみでている。このような道路がはたして「生活道」である

と主張できるかはなほだ疑わしい。しかも、白浜から古見にぬける縦断道は、それ以外の各地に散在する村落を素通りしていくのであり、たとえ西部と東部がこれによって、結ばれたとしても、すこぶる不親切な生活道なのである。これは要するに開発が先行して、住民の福祉対策がともなわないうという政府・企業の体質が色濃く滲みでているといわざるを得ない。

国立公園指定が意味するもの

国が指定した国立公園地域は島の西部を中心に約半分の面積と、石垣島まで広がっている。西表はおよそ総面積の九〇%の二万四

三二七haが国有林である。この国有林内にはイリオモテヤマネコが生息しているが、島民により密接に関係しているのは、重要なタンバク源の一つであるリュウキュウイノシンである。年間七、八〇〇頭も捕獲されるから相当なものだ。また、家の建築材も相当部分が国有林に依存している。彼らは自給自足的経済の中で、国有林に依存して生活せざるを得ないのだ。

ところが、これに伴う問題が生じる。リュウキュウイノシンを捕獲するはね震はイノシンの出沒する谷間のいたるところにかけられる。その数は、およそ数千カ所にも達している。しかし、どうしてもこのはね震に年一回くらいはイリオモテヤマネコが「偶然」にかかる。イリオモテヤマネコは今世紀最大の「発見」の一つであるといわれ、しかも全島で一〇〇頭とも五〇頭ともいわれるほど、絶滅の危機にさらされているという。国有林でしかも国立公園内におけるヤマネコの捕獲は、だから、たとえ偶然であるにしても、イリオモテヤマネコが学術的に「貴重」であるという理由によつて、国立公園内におけるイノシンの捕獲が禁止される危険性を十分に持っている。また国有林の利用は、沖縄民政府のもとで、入会権の共同利用がなされてきた。建築材搬出もその例である。これが沖縄の

日本政府への移行に伴う国有地化と国立公園指定によって大きな制限を受けることになる。

さて、日本における国立公園は、大部分が山岳地帯に設置されている。これらの地域では「定住」している人間は少ない。したがって、これらの地域を保護する上で、地域住民とのかかわりあい問題は、あまり障害にならない。だが、西表のように自然と人間が国有林の中で複雑にからみあっているような地域では、問題が別である。

国立公園指定が「国民」の共有財産であり、「日本」のすぐれた遺産の保護に重要な役割を持つものであるにしても、その理由ゆえに「全体」のために「少数」が犠牲になつてしまふ危険性が非常に高いからである。しかも、西表の国有林のうち、約半分が国立公園として、地域住民の生活を制限していく方向にありながら、残りの国有林は、西表住民の生活や経済とおよそ結びつきそうにもないバルブ会社に森林の開発を任せている。まさに、「開発」と「保護」が背中あわせに共存しているのだ。しかも、これらの決定は「国有林」であるという理由によつて、苦しい生活を余儀なくされている住民の意見や意志が何ら関与する余地のない形で排斥され、頭ごなしに決定されてしまつていく。この意味で

西表における森林の管理運営は矛盾そのものであり、彼らの生き方を無視したはなはだしく自家撞着な自然保護行政であるといえるであろう。

国立公園が、「すぐれた自然の風景地を保護する」とともに、その「利用の増進」を図り、もつて「国民の保健、休養及び教化」に資することが目的であるならば、その一番の享受者はまず西表の住民であるはずであろう。だが、西表に関するかぎりは西表の住民を「犠牲」にして、国民に「奉仕」しているのであり、「全体」の利益のために、地元の「少数」などどうでもいという意図がありありと、透けて見えるのである。

自然保護と住民とのギャップ

今日まで、自然保護諸団体が重ねて主張してきた西表の自然保護は、原始景観の保全とそこにすむ野生生物を保護することに、もっぱら主眼を置いていた。「学術的」にも「景観的」にもきわめて貴重である、というのがおおかたの根拠になつていらい。残すだけの価値は十分に持っている。だが、それはあくまで「自然」だけをとりあげたならばという限定つきでの話である。ところが、バルブ用材搬出用の縦断道路

建設に対する学者、自然保護諸団体らによる反対運動は一九七〇年の沖縄本土復帰とともに、にわかには活発になつた。道路建設に伴う環境破壊は、照葉樹林の長期的崩壊をもたらすばかりでなく、イリオモテヤマネコ・カンムリワシなど野生生物の生存に重大な影響をもたらす、というのがその理由である。そして、彼らは世論を背景に縦断道路の建設について休ませるまでにいたらしめた。

ところで、われわれ西表住民以外のよそ者は縦断道路建設が休止になつたところで、別に腹が痛むわけではない。むしろ、貴重な自然を守つたことが、利益をもたらしているかもしれない。だが、西表住民はこのことによつて、東部と西部を結ぶ生活道の完成が、また一歩遠のいたことになるであろう。彼らは、縦断道よりも海岸道の建設をむしろ望んでいるようだが、海岸道建設を当面期待できないいま、縦断道でもよいと考える人達も多くなつた。だが、たつた一つの小さな期待ですら、学者や自然保護諸団体が奪ひとつてしまう結果をもたらしたのだ。

照葉樹林や動物達を保護するために生態学の理論を拝借して、無計画な開発に待たをかけるのは一向にかまわない。けれども、これでは、植物や動物の保護を行なう

ためなら、地域住民の生活などどうなつてもかまわない、といつてゐるのに等しいであろう。もし、縦断道路が自然に深刻な影響を与えて困るのであれば、「破壊」に答へられる学問である生態学の理論を逆に応用して、縦断道路のかわりにより環境に対する影響の少ない海岸道の「建設」にも答えてやるべきではなかつたのか。むしろ、海岸道にしても、サンゴ礁やビロウ、アダ

ンなどの亜熱帯植物への影響を最小限にとどめて、なおかつうまく海岸道の建設が行なわれるような、計画なり提言をすべきでなかつたのだろうか。一方で「反対」し、かつ一方で「沈黙」を決めこんでゐる学者や自然保護諸団体は、要するに地域の住民などおおよそ眼中になく、ただ植物や動物達の保護をしたいばかりに、「學術的」とか「貴重」とかという言葉にすり替へて、住民を「誤魔化」してゐるといえるであろう。

学者や保護団体は貴重な生物の保護のためなら、西表に調査団まで派遣するほど熱心である。その自然保護家や動物愛好家達は、やがて一度は西表を訪れる機会を持つであろう。その時、地元住民の精一杯のお世話を受けて、自然を満喫して帰つていくに違いない。しかし、地域住民の生活を犠牲にさせたりえでの自然保護は、逆説的に自然保護思想の高邁な理念に反して、もつ

とも非ヒューマニスティックな結果に落ちることもあるということを経記すべきである。

天上のパン・地上のパン

およそ大多数の人間にとつて、精神的に自由意志のもとで生きるようには創られていないようである。キリストが悪魔の誘惑を退けて「人はパンのみに生きるに非ず」と述べたとき、それは確かに正しい。けれどもパンという魅力的な呪縛から逃れられる人間はきわめて少ない。「幸福」いや少なくとも「満足」の条件にとつて、物質は必要条件ではないが、十分条件ではある。だから、人間は貧しい時、「幸福」になることは難しいのが一般的である。なぜなら「充たされて」いないからである。

さて、戦後の自然保護運動は豊かな自然を残そうという、およそ成長主義・生産主義を否定したきわめてヒューマニスティックな理念を、錦の御旗にして登場した。だが、それを支えてきた階層は都市の有識者・中産階級の人達であつた。しかし、それは「地方」の出来事は「都市」とはいささかも関係なく、いくら自然保護の声を大にしても、自分の腹は全然痛まない思想であつた。したがつて自然保護思想そのものが鳥を守ろう、花を愛そうという、誰しもが

羨ましがらうようなヒューマニスティックな没社会的な思想、都市住民の中だけで通づるような考えを維持してきたものといえるであろう。それは「尊い」生命の保護は、すなわち「善」であり、由に「正しい」という意識が根底に流れていたのである。けれども、誰もいない山岳ならともかく西表のように自分達の前に豊かな自然がありながら、非常に苦しい生活を強いられるような地域では、右の考えは通じないであろう。動物や植物の保護の為には「お前達」の生活は今のままでよい、というに等しいからである。自然保護論者が指摘するように、植物や動物の問題は、「人間」の問題だからなのだ。

また、われわれの生活とほとんど関係ありそうにもない西表の自然が、たとえ貴重であれ豊かであれ、そこで生活してゐる人々が、少しでも豊かなより安定した生活を希求しつづけ、そのためにはどうしても自然を破壊しなければならぬと問うたとき、われわれは「自然を守る」という権利を持つていそうにもない。それは、西表の人々が本土に比してあまりにも「充たされ」ていないからである。それにくらべて、われわれがほぼ物質という「地上のパン」が保障され、しかも豊かさという「天上のパン」をも得ようとしてゐる今日、西表の自

然を守ることだけを要求しているとしたら、それはきわめて独善的であるだろう。

西表の自然保護とは、「開発か保護か」の二者択一のうえでの議論ではなく、「生物も人間も」の共存原理でもって、学者や自然保護団体が、西表住民の生活上に知恵をしぼり、有効な利用開発形態を考えていくことではないのだろうか。それはおそらくは、きわめて困難であろう。けれども今日、都市の自然保護団体や学者、それに自然保護行政にもっとも欠けている精神は「腹を痛める」ことであろう。これは一つ西表の問題にとどまらず、「地方」と「都市」における問題なのである。真の自然保護とは、人間あつての自然であるという認識から出発するのだから。

おわりに

南アフリカ共和国はアフリカ諸国の中でも、有数の「野生の王国」であるといわれる。そして「王国」の独立を保障するために、およそ徹底した保護政策が行なわれている。しかし、また世界で最も醜悪で最も破廉恥な人種差別の「共和国」であることも、あまねく知れわたっている。共和国のズールー族は、アパルトヘイト政策によっておよそ動物以下の生活を強いられるおりに、まさに「地獄の王国」である。

南アフリカ共和国の自然保護区の面積は約一、一九〇万haで、私設の自然保護区も多数設けられている。その一つクルーガー国立公園は、同国最大の動物保護区である。この公園は動物の種類・個体数の豊富さにおいて、他のアフリカ諸国のそれを凌駕するほどであり、「平らな土地を樹木が覆い、沼と泉」が散在する二万一〇〇〇km²の公園内には、三〇万頭の動物と七千頭の象が生活を「楽しんでる」という。

黒人リザーブの一つ、トランスカイ自治区は三万四〇〇〇km²ほどの面積で、「大溪谷の中腹」にある「細い、白く乾いた道」を行くと、「樹木の緑が谷底に少しこびりついているだけ」の部落が点在し、一五〇万人の黒人と、六〇〇万頭の家畜が「ひしめきあつて」いて、耕地面積一％の畑から収穫される穀物だけではたりず、トカゲやネズミで飢えを凌いでいる土地であるという(南ア共和国の内幕)伊藤正孝著、一九七一、中公新書)。

南アフリカ共和国にすむ三六〇万人の白人は全国土の八七％を所有し、残り一三％のリザーブで、一、三〇〇万人の黒人(ズールー族)が生きねばならず、その面積は動物保護区の総面積よりも若干広い一、五九六万haにしか過ぎない。しかも、動物保護区で動物の群れに投石したり、車で追回し

た黒人は、彼らの収入の五年分位に相当する二〇万円の罰金が課せられている。一方政府が黒人を立退かせるときは、ブルドーザーで追い立てる国なのである。

「異教徒」黒人の生存を迫害している南アフリカ共和国政府は動物達を偉大な神の慈愛でもって祝福し、完璧ともいえる制度を設け、徹底した動物保護を実施している。だが、キリストの荒野における試練を比喩すれば、「蝨と草の根ばかりで命をつないでいる」に等しい一、三〇〇万人の民が、三六〇万人の「キリスト者」の安逸な生活を築き上げるために、どうして「十字架」を背負って堪え忍ばなければならないのだろうか。

ドストエフスキーはイヴン・カラマーゾフの口を借りて、われわれに試みている。「仮りに、お前が最後において人間を幸福にし、かつ平和と安静を与える目的をもって、人類の運命の塔を築いているものとして、この行為はただ一つのちっぽけな生物を——例のいたいけな拳を固めて自分の胸を打った女の子でもない、是が非でも苦しめなければならない。この子供の贖われざる涙の上でなければ、その塔を建てることができないとしたら、果たしてこんな条件で、その建築の技師となることを承諾するかね」(「カラマーゾフの兄弟」より)。

西表島における自然保護はドストエフスキーの質問にだけだけ堪えられるであろうか。そして、彼の問いかけは、西表島のみならず学者や自然保護論者が一度は通過しなければならない門に違いない。

(付記) その後の状況が変わったので、若干の訂正をしたり、今年、縦断道の建設が正式に中止になり、海岸道の建設が始まった。この道路は過去何回も入札に失敗した経過があった。一日も早い海岸道の完成を望みたい。

(千葉大学園芸学部応用昆虫学研究室)